

新闻摘要

にゅーすきじ ニュース記事から (2020年12月1日～2021年5月31日) ねん がついつたち にち

有关遗华日本人等、中国(库页岛)归国者的新闻

ちゅうごくざんりゅうほうじんとう ちゅうごく さ はりん きこくしゃかんれん にゅーす
中国残留邦人等、中国・サハリン帰国者関連のニュース



2021年1月16日(星期六)

日本人遗华孤儿王林起先生为了报答养育自己的养父母的恩情，至去世前为止一直都是作为一个中国人生活在北京。王林起先生于去年11月过世，享年85岁。比他年长12岁的养母也于同年底去世，如同是追随着养子一起去了另一个世界。王先生原名叫“渡部宏一”，出生于日本的山形县，5岁时随同家人一起去了“旧满洲”。在战争结束时的混乱中，他同时失去了5位亲人，10岁时成了孤儿。生前，王先生把自己的遗愿嘱托给了家人，他说：“我死后，希望能把(没能返回日本的)我父母、弟弟妹妹和我，我们一家人的姓名都刻在山形的祖先的墓碑上。”(朝日新闻 摘要)

2月6日(星期六)

埼玉县的卷口清美女士，作为传述遗华日本人的体验的“战后世代的讲述人”，一直积极参加讲述部的活动。她讲述的是，在76年前的战败前后的混乱中成了遗华妇人的祖母，シズ女士的一生。“我现在能在这里活着是因为有我祖母的人生。我们还得到了很多人的帮助。参加这项活动也包含了感谢之意，我愿意正视历史，一直讲述下去。”(朝日新闻 摘要)

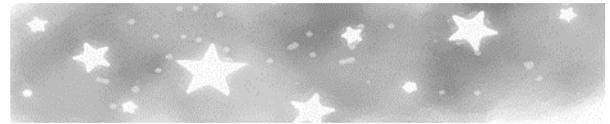


2月19日(星期五)

由NPO(非营利组织)“中国归国者之会”(东京都三鷹市)主办的摄影记者山本宗补先生的摄影展览“战后依然未结束～被刻印的加害与被害的记忆”，于2月19日(星期五)至21日(星期日)的三天，在三鷹市公会堂举办。以同会的创始人，遗华妇人的铃木则子女士(已故)等的战争被害者为拍摄对象的20多件摄影作品在此展出。(东京新闻等的摘要)

2021年1月16日(土)

日本人残留孤児の王林起さんは、自分を育ててくれた養父母の愛情に報い、最後まで中国人として北京で暮らし、昨年11月に85歳で亡くなった。12歳年上の養母も同年末、後を追うようにして旅立った。王さんは日本の山形県で「渡部宏一」として生まれ、5歳のとき家族と共に旧満洲に渡ったが、終戦の混乱で家族5人を失い、10歳で孤児になった。生前、「自分が死んだら、山形の先祖の墓に(日本に帰れなかった)自分と尚親・弟妹たち家族の名前を刻んでほしい」との願いを家族に託していたという。(朝日新聞より)



2月6日(土)

埼玉県^{さいたまけん}の巻口清美^{まきぐちきよみ}さんは、中国残留邦人の体験^{たいけん}を伝える「戦後世代の語り部^{かたべ}」として活動^{かつどう}している。語る^{かた}のは、76年前の敗戦前後の混乱の中、中国残留婦人^{ふじん}となった祖母・シズ^{しず}さんの人生だ。「私^{わたし}が今ここに生きているのは祖母の人生があったから。多くの人に支援^{しえん}もしてもらった。感謝^{かんしゃ}の意味^{いみ}も含め、歴史と向き合^{むきあ}って語^{かた}っていきたい」(朝日新聞より)

2月19日(金)

NPO法人「中国帰国者の会^{かい}」(東京都三鷹市^{とうきょうとみたかし})の主催^{しゅざい}により、2月19日(金)～21日(日)の3日間、三鷹市公会堂^{こうかいどう}で、フォトジャーナリスト・山本宗補^{やまもとむねすけ}さんの写真展「戦後はまだ～刻まれた加害と被害の記憶^{きこい}」が開かれた。同会の創設者^{そうせつしゃ}で残留婦人^{ちゅうりゅうふじん}だった鈴木則子^{すずきのりこ}さん(故人^{こじん})などの戦争被害者^{せんそう}を被写体^{ひしゃたい}とした20点余りの作品^{てんあま}が展示^{さくひん}された。(東京新聞等の摘要)

2 月 23 日 (星期二)

在遗华孤儿国家赔偿诉讼中担任京都诉讼的原告团长的奥山イク子女士，2 月 23 日因闭塞性化脓性胆管炎在京都市内的一家医院病逝，享年 88 岁。奥山女士 9 岁时随家人作为开拓团移居“旧满洲”，之后成了遗华孤儿，1990 年回国。为了支援居住在伏见区小栗栖地区的归国者及其家人们的生活，于 98 年开设了日语教室，教室一直持续到去年春天。(京都新闻 摘要)

3 月 7 日 (星期天)

作为遗华日本孤儿、遗华妇人的孩子出生在当地、被称为“第二代”的人们，一直在坚持向日本政府请求支援的活动。到目前为止，支援的对象仅限于第一代。至于第二代，连准确的人数都还没有把握清楚。由于上了年纪的人也越来越多，2 日在福冈市第二代的当事者们发表将开始发起在线众筹，以寻求援助。(朝日新闻 摘要)

3 月 19 日 (星期五)

日中合拍的电影《又见奈良》在中国公开上映了。这部电影描述的是一位遗华孤儿的养母前往日本的奈良寻找失联了的日本遗留孤儿的养女的故事。该片由日本导演河濑直美、中国导演贾樟柯、崭露头角的导演鹏飞等制作，全部的摄影都在日本完成。鹏飞导演说：“对于中日两国来说，遗华孤儿或许是个很沉重的题材，但是我们绝没有打算把这部电影拍成一部“沉重内容的影片”。我们想通过这个故事来展示中国人的母亲的坚强。(朝日新闻等的摘要)

3 月 30 日 (星期二)

描写了遗华妇人动荡不安的半生的单人剧《归来的老奶奶》的最后一场演出，在东京中央区的银座博品馆剧场上演了。扮演的舞台女演员神田さち子本人也是一位从“旧满洲”归来的人，她说：“即使我本人成为一个孤儿也不足为奇。”神田女士持续在舞台上演出了半个世纪，这出单人剧加起来一共上演了 200 场。在中国的公演也多达 9 场。(读卖新闻等的摘要)

3 月 31 日 (星期三)



新聞等より)

2 月 23 日 (火)

中国残留孤児国家賠償訴訟で京都訴訟の原告団長を務めた奥山イク子氏が 2 月 23 日、閉塞性化膿性胆管炎のため京都市内の病院で死去した。88 歳。9 歳の時に家族とともに開拓団として旧満洲に渡り、残留孤児になった。1990 年に帰国。伏見区小栗栖地域に住む帰国者や家族の生活支援のため、98 年に日本語教室を設立、昨春まで続けた。

(京都新聞より)

3 月 7 日 (日)

中国残留日本人孤児や残留婦人の子どもとして現地で生まれた「2 世」と呼ばれる人たちが、日本政府に支援を求める活動を続けている。これまで支援の対象は 1 世に限られており、2 世は正確な人数も把握されていない。高齢になる人も多く、福岡市では 2 日、当事者らがネットで支援を募るクラウドファンディングを始めると発表した。(朝日新聞より)

3 月 19 日 (金)

日中合作映画「再会の奈良」が中国で一般公開された。この映画は、中国残留孤児の養母が日本の奈良を訪れ、連絡の途絶えた日本人孤児の娘を捜しに行くという物語で、日本の河瀬直美監督、中国の賈樟柯監督、新進気鋭の鹏飞監督らが製作、撮影は全編日本で行われた。鹏飞監督は「中日にとって残留孤児は重いテーマかもしれないが、決して“重い作品”にするつもりはない。このような物語を通して中国人の母親の強さを表現したい」と語った。(朝日新聞等より)

3 月 30 日 (火)

中国残留婦人の波乱万丈の半生を描いた一人芝居「帰ってきたおばあさん」のラスト公演が、東京中央区の銀座博品館劇場で開かれた。演じた舞台女優・神田さち子さんは、自身も旧満洲からの引揚者で、「私が孤児でもおかしくなかった」という。神

至战争结束为止的大约 40 年间,由从日本曾经统治的旧桦太(现俄罗斯・南库页(萨哈林)岛)归来的人们组成的“全国桦太联盟”于 3 月底解散,落下了 73 年的历史帷幕。据说这是由于会员的减少以及高龄化所致。(读卖新闻、朝日新闻等的摘要)

4 月 4 日(星期日)

在东京都江戸川区有一家专门为遗华日本人提供日托服务的设施“一笑苑”。在这里,会话中交织穿插的语言以及告示文都是中文,播放的是中文流行歌曲,护理人员也几乎都是中国人。所长佐佐木弘志先生也是遗华日本人第二代,因为和一位归国者第一代的女性的相遇,使他觉得“不能让历经战争苦难的第一代,到了晚年还在心酸艰辛中渡过”,据说这成了开设“一笑苑”的契机。

据厚生劳动省的调查,全国高达 8 万家的护理事业所中,能用中文应对的只有 380 家左右,尤其是入住设施能用中文应对的更是少数。(东京新闻摘要)

4 月 8 日,星期四

德岛市出身的遗华孤儿乌云女士(82 岁),日本名是立花珠美。乌云女士多年在中国的内蒙古自治区致力于植树活动和教育支援。为了把她的事迹传达给后代,德岛县内的有志之士制作了一本面向中小学生的册子。小册子里介绍了乌云女士成为孤儿的经过、与养父母相遇的过程、文化大革命期间在受命运摆布的同时潜心教书育人的教员时代的经历,记述了为了回馈养父母以及中国的养育之恩,乌云女士毕生致力于沙漠的绿化以及贫困家庭的教育支援的事迹。(德岛新闻摘要)



4 月 11 日(星期日)

为了追悼在战争前、战争中,作为国家政策以农业移民的身份被送到“旧满洲(现中国东北部)”的“满蒙开拓团”等的牺牲者的追悼集会在多摩市的“拓魂公园”举行了。包括当事者在内的大约 30 人参加了这个追悼活动。集会每年 4 月举行。据说最多的时候大约有 2000 人参加。但是,由于

田さんは半世紀にわたり舞台に立ち続け、一人芝居の公演は通算 200 回を数えた。中国公演も 9 回実現させている。(読売新聞等より)

3 月 31 日(水)

終戦までの約 40 年間、日本が統治した南樺太(現ロシア・サハリン)からの引揚者でつくる「全国からつとれんめい」が 3 月末に解散し、73 年の歴史に幕を閉じることになった。会員の減少と高齢化によるものという。(読売新聞・朝日新聞等より)

4 月 4 日(日)

東京都江戸川区に中国残留邦人専門サービス「一笑苑」がある。飛び交う言葉や掲示物はすべて中国語で、中国の流行歌が流れ、介護スタッフもほとんどが中国人だ。所長の佐々木弘志さんも残留邦人 2 世で、ある 1 世の女性との出会いにより「戦争で苦勞した世代に、晩年まで辛い思いをさせてはいけない」と感じたことが、「一笑苑」開設のきっかけになったという。



厚生労働省の調べによると、全国で八万に上る介護事業所のうち、中国語で対応できるのはわずか 380 か所ほどで、特に入所施設は少ないとされる。(東京新聞より)

4 月 8 日(木)

徳島市出身の中国残留孤児、烏雲(うん)さん(82) = 日本名・立花珠美 = は長年、中国の内モンゴル自治区で植林や教育支援に携わっている。その功績を次世代に伝えようと、徳島県内の有志が小学生向けの冊子を作った。烏雲さんが孤児になった経緯や養父母との出会い、文化大革命に翻弄されながらも子ども達に勉強を教えた教員時代を紹介。

養父母や中国に恩返しをするため、砂漠の緑化や貧しい家庭の教育支援に力を注いできた生涯がつづられている。(徳島新聞より)

当事者の減少加之新型コロナウイルスの影響，去年和今年の参加人数減少了很多。居住在埼玉县的卷口清美（55 岁）女士，出生于一个遗留在中国的来自新泻县柏崎市的开拓团团员的家庭中，16 岁来到日本。卷口女士逐一念出开拓团的名称进行追悼之后，所有的参加者集体默哀悼念。（毎日新聞、東京新聞等の摘要）

4 月 17 日（星期六）

作为把遗华日本人经历的艰难历程传达给后代的“战后世代讲述人”们之一，伊藤光子女士（东京都）自身也是遗华孤儿的第二代。在首都圈中国归国者支援・交流中心于 17 日举办的讲述会中，作为讲述人，伊藤女士做了她的第一次公开演讲。她讲述了作为遗华日本人的母亲的苦恼，以及回到日本后这 35 年来的一家人的苦恼。她说之所以成为讲述人是因为：“希望人们一起来思考战争会给人们带来什么。”（东京新闻 摘要）

5 月 5 日（星期三）

在吉林省长春市有一座为抚养遗华孤儿的养父母们建造的公寓“中日友好楼”。去年 10 月，住在这里的最后一位养父母的崔志荣女士因年迈去世。“中日友好楼”是 30 年前由日本人捐资建造的，据说曾经有 30 多位养父母居住在此。

现在，住在这里的几户人家都是养父母们的子孙。作为中日民间友好交流的见证，人们希望这座楼能留存下去。（朝日新闻 摘要）



◆ 请注意：本栏目的新闻为见诸报端的报道摘要，并非政府正式公布的内容，其中一部分还包含媒体的观察消息。

4 月 11 日（日）

戦前・戦中に国策として旧満洲（現中国東北部）へ農業移民として送り出された「満蒙開拓団」等の犠牲者を悼む集いが多摩市の「拓魂公苑」で開かれ、当事者を含む約 30 人が参加した。この集いは毎年 4 月に開かれている。最盛期には約 2000 人が集まったというが、当事者の減少に新型コロナウイルスの影響も加わり、昨年と今年は参加者がさらに減った。新潟県柏崎市からの開拓団の中国残留者の家庭に生まれ、16 歳で来日した、埼玉県巻口清美さんが団の名を一つずつ読み上げて追悼した後、参加者全員で黙とうをささげた。（毎日新聞・東京新聞等より）

4 月 26 日（土）

中国残留邦人の労苦を後世に伝える「戦後世代の語り部」の一人、伊藤光子さん（東京都）は自身も残留孤児 2 世だ。首都圏中国帰国者支援・交流センターで 17 日開かれた講話会で、語り部として初の講話を披露。残留邦人としての母の苦悩、帰国後 35 年の家族の苦悩を語った。語り部となったのは「戦争がもたらすものについて考えてもらいたかったから」という。（東京新聞より）

5 月 5 日（水）

吉林省長春には、中国残留孤児を育てた養父母のために建てられたアパート「中日友好楼」がある。昨年 10 月、ここで最後の養父母だった崔志荣さんが老衰で亡くなった。「中日友好楼」は、30 年前に日本人の寄付で建てられたもので、かつては 30 人以上の養父母らが入居していたという。

現在は養父母らの子孫数世帯が暮らししており、中日の民間友好交流の証しとして、存続が期待されている。（朝日新聞より）

◆ ご注意：本欄の内容は、一般の新聞などで報道された内容を中心に要約して掲載しています。したがって、政府が公式に発表したものではなく、一部には報道機関の観測記事なども含まれています。